

柏瀬祐之著 『午後三時の山』

なんともユーモラスで実に面白い山行紀行集である。読み進むうちに、思わず笑ったり、微笑んだり、ウーンと唸ったり、ハッハッハッとわが意を得たり……。著者はどこかの会社の役員だそうだが、白水社「日本登山大系」全10巻の編集者でもあるから、山の方も相当の凄腕であるらしい。文筆の才もタダモノではない。

特に本書の題名ともなっている「午後三時の山」は圧巻である。黒部辺りの沢で偶々会った他人と交流ができて、彼等と一緒に岩を齧ってみたり、冬の北海道の知床半島に遠征してみたりする話である。

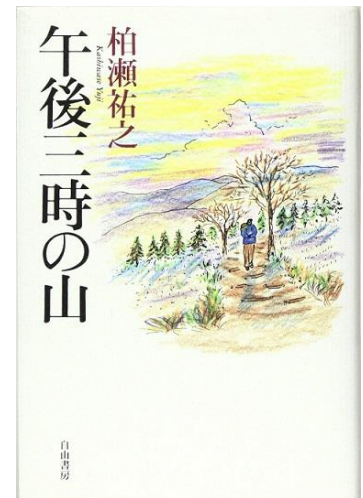
彼等とは、組関係者だとか保父^{ホフ}を生業にしている山岳会の黒幕親分だとか、ラテン風の老け顔をした元園児だとか、若づくりの塗装職人だとか、新人歌手の元マネジャーだった御仁だとか元サヨク（左翼）だとか種々雑多な（つまりは多様性の高い）仲間で、その言動たるやそれぞれが常軌を逸しているように見えながら、実は快いハーモニーを醸成している様子が鮮やかに、ユーモラスに、しかも哲学的に（!?) 描かれているのは、登場する人物が個性鮮やかなタダモノでない人々であるからであろうが、やはり著者の筆もタダモノではない。

著者は、このような仲間と北海道の果てから南洋の西表島の沢まで全国あちこちの秘境の岩や沢を歩き廻っているらしい。その内の2/3は出張のついでというから、羨ましい限りである。

一見、沢で焚き火を囲んでの酒呑みの馬鹿話と艶笑譚という風情ではあるが、なかなかどうして、行間から立ち昇る蘊蓄が深い。「山のにおい」という章では、登山という行為の論考に蘊蓄を傾けているが、どこかの登山評論家のような机上の空論ではなく、“登山者の身体”から滲み出ている哲学に考えさせられるものが多い。

山も思考も筆も、やはりタダモノではない。

白山書房1996年刊



[「山書の小溪」目次に戻る](#)